ミュンヘンの文学散歩 (5)

佐　野　晴　夫

19. ガレリー街

ルートヴィッヒ街入り口右側に「選定侯画廊」として北部宮廷庭園アーケード建造物上に1780年から翌年にかけてレスピリエンツによって建てられたギャラリーがある。かって，カルル・テオドールによってミュンヘンへ運ばれたマンハイム・ギャラリーのための建物であった。1824年のアルテ・ピナコテーク（旧美術館）落成後は，この建物の管理が1824年に設立された美術協会へ移った。1944年にひどい戦災に遭遇したため，1952年に簡素化されて再建された。地階には美術ギャラリーと美術協会がおかれているが，これと並んで1953年以降「演劇博物館」(Theatermuseum, 8000 München 22, Galeriestr. 4a. 〈Hofgartenarkaden〉, Telefon 222449) が常設されている。宮廷付き女優クララ・ツィグラーによって創設され，1910年に開設されたものである。この女優の個人的思い出の品々である舞台意匠スケッチ，人物画，メダル，芸術家肖像写真，肉筆原稿，４万冊にものぼる尨大な専門書文庫のコレクションから成っている。利用は無料であるけれども，閲覧時間は曜日・季節によって変更があり，予め予約することをお勧めする。

20. ルートヴィッヒ街南側の建物

建築家ばかりではなく，美学的な関心をもつもので，ミュンヘンへやってきた者は，新しい都市建設の試みに関心を寄せてルートヴィッヒ街を訪れる。宗教学者姉崎正治はミュンヘンですごした３日目にあたる1908年（明治41）６月８日にコルネリウスの「最後の裁判」を観るために，ルートヴィヒ寺院へ出かけた。

「その寺のあるルートヰヒ寺のあるルードヰヒ町は，宮城前から，凱旋門まで十町餘りの間，全くフヰレンツェの写しの様で，国王ルードヰヒ一世がイタリア風の美術を好んで十九世紀の前半に経営したもの。南の端にはフヰレンツェのロジアそのまゝの回廊風の家を衛士の紀念館にして，それから町の両側の家は皆フヰレンツェ風のルネサンス。最後に凱旋門はロマのテトスの門

に似てクラシクの高尚な門。十九世紀の始には，此の様にして全くイタリアを模倣したミュンヘンの美術が，百年後の今日には独立の発達をして，此頃出来た新しい町の家々は，クラシクとヌヴォーとの程よい調和の新式が多く，一種のミュンヘン風が出来た。将来ヨーロパの建築はこのミュンヘン風と，イギリスの新ゴシクとが益す勢力を占める様になるであらう。[38]」

これまで述べた如く，ルートヴィヒ１世の画期的な最も重要な偉業であるルートヴィヒ街は1816年から1843年にかけてクレンツェとゲルトナーとによって建設された。この大通りは幅37m，凱旋門の北側まで全長1170mに達する。大通りの右手には大蔵省，国立銀行，国防軍管区司令部，国立図書館，ルートヴィヒ教会が見える。そしてフーバー教授広場，さらにショール兄妹広場と名称をかえると，もうミュンヘン大学法学部校舎（Geschwister-Scholl-Platz 1）である。インゲ・ショール著『白バラ』（1952）で全世界の人に知られるようになったミュンヘン大学の学生で反ナチ運動に携わったショール兄妹を忘れないため，彼らを記念して名付けられた広場であるが，またフランツ・ヨーゼフ街13番の建物にはおちあい場所を示す「白バラ」の記念碑がある。他方，この広場正面には大通りを夾んで水盤をもつ噴水がシメントリーに配置されている。これはローマのペトロ広場の噴泉をモデルに1840年にF.ゲルトナーのプランに従ったものである。大学本部の建物や付属図書館とうまく調和している。

21．バイエルン国立図書館

ゲルトナーによってフィレンツェ風に1832年から十年かけて設計されたバイエルン国立図書館（Bayrische Staatsbibliothek, 8000 München 22, Ludwigstr. 16, Telefon 21981）は，豪壮な階段建築をもち，その上部に図書館の創設者である16世紀のアルブレヒト王と建立したルートヴィヒ１世の立像を飾るが，いずれもシュヴァンターラーの作品である。

戦時中およそ50万冊の書籍が焼失したけれども，目下，この図書館には440万冊の蔵書をもつドイツ最大の図書館である。ドイツ語で書かれた５万点の手稿のうち，目星しいものとしてヴェッソブルンナー祈祷書，ニーベルンゲンのうた手稿A（13世紀末）オーレウス皇帝法典，A.デュラーとL.クラーナッハの挿し絵入り皇帝マキシミリアン１世の祈祷書といったものがある。初期の印刷物，片面刷りの端物印刷物等（約58,000点）音楽図書館（約９万点），東洋学並びに東欧文学（約40万冊），約12,000種の発行雑誌。とくに哲学，歴史，神学をはじめとする精神科学，バイエルン関係諸学，系譜学，旅行記，法律学，

医学，自然科学，美術そして建築に関するものが目立つ。

旅行中に閲覧しようとするものは，入り口受付けでパスポートを提示すれば，閲覧利用できる。館内で資料の複写を依頼ができるけれども，長期滞在者で館外へ借り出して読んだり，廉価なコピー代金で複写を考える場合には，60マルク程度の保証金（Kaution）を預けておけば，1度に10冊まで館外貸出ができる。また日本からの新聞が読みたい者は，3階の極東部門へ行くならば，数日遅れの「毎日新聞」を読むことができる。何故か伝統的に同紙のみで，他紙は数カ月後れの縮尺版のみである。同部門には，中国学にくらべ，あまりにも日本学関係のものが少なく失望させられるけれども，比較文学に興味をもつ者には必見のフローレンツ著「日本文学史」―― バイエルン国王へ献じられた著書であるから，当然のこととして ―― やボノー著「現代日本詩史」等が開架されていることを申し添えておく必要があろう。

22. シェッフェルの喜びと悲しみの仮寓（ルートヴィヒ街18番）

国立図書館の並びに現在大学土木建築局（Universitätsbauamt, Ludwigstr. 18）が入居している。この瀟洒な建物にかって1856年10月から翌年初めにかけて「エッケハルト」「ゼッキンゲンのラッパ手」といった代表作で当代人気随一の詩人ヨーゼフ・ヴィクトル・フォン・シェッフェル（1826-1886）が住んでいたことは知られていない。とかくふさぎがちだったシェッフェルもこの都市と住居がすっかり気に入り，その消息を妹マリアへ書き送っている。そして妹は1857年早々に兄のもとを訪れた。兄妹はシュタルンベルク湖へスケート遊びに出かけたが，その直後マリアは急病になり，5日のちには死んでしまった。シェッフェルの悲しみは気が狂わんばかりであった。

詩人シェッフェルの存在を日本人が識ったのは，森鴎外を中心とする新声社の訳詩集『於母影』（明治22）の中の2篇「笛の音」「別離」を通じてである。作者は，森鴎外自身面識をもつ数少ないドイツ詩人のひとりであった。《Der Trompeter von Säckingen》のうち，鴎外自ら「少年ヴェルナーの歌」の巻の第12章（落合直文訳「笛の音」のうち「少年の巻，その5」に該当）の意訳を試みたのも，彼のミュンヘン体験，とりわけ画家原田直次郎たちと一緒にすごしたシュワビング体験と無関係でないよう思えるのである。とかく彼の初期の小説は彼自身のベルリン時代の実体験からのみ考察されることが多かったが，一方で，シェッフェル詩の過去に対する執着と未練，現在に対する空しさと虚脱感は森鴎外の人生観からくる諦念に通じている。そしてとりわけ『文つかい』

において姫を愛慕し，姫の楽の音に合わせて笛を吹く欠唇の牧童のエピソードはシェッフェル詩の下敷きなしには考えられず，他方，『舞姫』の太田豊太郎とエリスの関係と心理状態についても，彼の「独逸日記」のミュンヘン時代を見れば，親友原田直次郎とその愛人マリーの間柄等も微妙に反映していることに気付かされる。そしてシェッフェル詩の抄訳『別離』こそ，異郷で相愛の恋人と別れを告げる太田豊太郎の世界であり，また森鴎外が自ら封じ込めなければならなかった体験世界でもあった。

23. 聖ルートヴィヒ寺院

隣接する聖ルートヴィヒ寺院（St. Ludwig, Ludwigstr. 20）は，ルートヴィヒ１世の命を受けて，F. ゲルトナーが1829年より15年かけて教区教会並びに大学付設教会として建てた。1944年に爆撃をうけ，1955年に元通りに内陣も復元されたが，1903年に当地を訪問した姉崎正治は，当初のたたずまいを次のように描写している。

「ルートヰヒの寺では勤行の済んだ処で，参詣の人の居残つてをるのもある。その間に腰かけて正面の『最後の裁判』を見る。コルネリウスの画風は少し装飾風で，一つ一つ人物を画くと中々かういふ大幅の纏まりには適しない。『最後の裁判』の画も大分見たが，ジオットの賢明な裁判官としてキリストを画いたの（パドア）と，ミカエル，アンジエロが大きな混沌を画いたの（ロマのシステナ堂）との外は傑作がない。但こゝのコルネリウスの作にはイタリアの画のように恐ろしい風がなく，中世紀の『最後の裁判』の恐ろしい考へが薄らいだのを示す。[39]」

24. ルートヴィヒ街北側の建物

バイエルン州中央銀行，かっての婦人養老院，かっての盲学校の建物が並んでいる。そして道の向こうに大学の図書館等の建物が続く。各学部，各研究所毎の図書館の方が専門書に関しては充実しているけれども，こちらには，あらゆる学問分野を網羅するおよそ百万冊の蔵書が収納されている。

25. ミュンヘン大学

同大学は設立者に因みルートヴィヒ・マキシミリアン大学とも呼ばれる。現在，カトリック神学部，プロテスタント神学部，法学部，経営学部，経済学部，林業学部，医学部，獣医学部，文化・史学部，哲学・理論・統計学部，心理・

教育学部，考古学・文化科学学部，言語・文芸学部Ⅰ，同学部Ⅱ，社会学部，数学部，物理学部，化学・薬学部，生物学部，地球学部から構成され，毎年5万人をこえる学生が受講に訪れる。

同大学の歴史は1472年ランツフートの領主ルートヴィヒ公によってインゴールシュタットに創立されたことに始まる。16世紀には反宗教改革の精神的な中心地ともなった（ヨハネス・エック）。1800年にマックス4世ヨーゼフによってランツフートへ，さらに1826年にルートヴィヒ1世によってミュンヘンへ移された。当座は，すでに言及しておいた如く，ノイハウザー街51番にあったかってのジェスイット会学院の建物へ入居した。1840年にルートヴィヒ街の公共建築物としてたてられた現在地（Amalienstraβe 58）へ移って以降，数次にわたって建物は拡張され，学術的にもドイツで主要な大学のひとつとして発展してきた。その礎を1826年に紹聘された歴史学のヨーハン・ヨーゼフ・ゲーレス教授が先んじて築いたことから，彼を顕彰する像が本館2階大講堂へ通ずる階段脇に置かれている。

26. 凱旋門

ルートヴィヒ街の北端にルートヴィヒ1世の提案でバイエルン軍の記念物として1843年から9年かけて建造された。ローマのコンスタンツィンのアーチを手本にしてF.ゲルトナーによって手がけられ，彼の死後は弟子のメツゲラーによって完成された。1944年にひどい戦災をうけ，1958年に部分的に復旧され，さらに1972年に残りの四頭立の馬車が再び据えられた。建造物は3つの門から構成され，前部におかれた四本の柱によって南北のフロントが接続されている。J.M.v.ワグナーの作品である勝利の女神たちによって上部が飾られ，同様にワグナーの戦闘場面のレリーフとバイエルン州の浮き彫りが添えられている。頂上を飾るのは，獅子に曳かれる戦車に乗った青銅製のバヴァリア女神（ワグナーのプランによったブルッガー制作のバヴァリアとハルビッヒ制作の4頭立の馬車）である。

27. レオポルト街

この門から先に続く大通りはレオポルト街と名称をかえる。カフェ・テラス，レストラン，ブディック等が両側に広がる街路は，遊歩する者にシュワービングらしい魅力をたたえてうったえる。

日本から留学にきたもので，下宿さがしするものは，ミュンヘン学生援護局

(Studentenwerk München, 8000 München 40, Leopoldstr. 15, Telefon 381961)を一度は，訪れてみるが良かろう。工科大学，美術大学，音楽大学等の学生をふくめて経済的・文化的・健康上の問題の相談にのってくれる。教育促進・健康管理部門，学生寮・貸室斡旋部門，学生図書館・教授補助部門，給食部門の業務に分かれている。学食（Mensa, Leopoldstr. 13）がすぐ近くにあり，月曜日から金曜日までの11時より14時30分まで開いており，必ず数名の日本人の学生には会える筈なので，誰かに詳しく聞くがよい。学食は市内の下記の2個所にもある。

Mensa in Pasing, Am Stadtpark 20

Mensa im Altstadtklinikum, Schillerstraße 47

なお，学生援護局や学生食堂のあたり周辺一帯にかってはレオポルド皇太子宮殿が広がっていたところから，シュワービングの面目を宿す代表的な街路にレオポルトの名称が選ばれたのである。

28. インゼル出版社の発祥地（Leopoldstr.4）

凱旋門のすぐ東脇に「バイエルン再保険株式会社」というギリシャの円柱を模して建てた5階建ての風格ある建築物がある。これは，今世紀初頭，市内で最も優雅で豪奢な建物のひとつに数えられた。ここで寄り付きがたいようなエリート対象の美術雑誌「インゼル（島）」が編集された。この建物の中の小部屋で，新しく芸術的に真剣に受け入れるべきものなのかどうかが決定されたのである。

恐らくスペイン国王アルフレド12世の庶子だと噂され，ドイツの億万長者の養子で，尨大な資産の相続人であった2名のブレーメン人，つまりアルフレト・ヴァルター・ハイメル（1878-1914）およびルドルフ・アレクサンダー・シュレーダー（1878-1962）の住む館であった。ミュンヘン児たちは，ハイメル等の生い立ちと資産，出入りする美しい婦人たちとの色ごとやお祭りさわぎなどを噂し合った。

この地で美術雑誌「インゼル」は1899年秋創刊された。ハイメルとシュレーダーのほかオットー・ユーリウス・ビーアバウム（1865-1910）が出版に従事し，デーメル，リーリエンクローン，アルノー・ホルツ，ホフマンスタール，リルケ，ヴェーデキント，エルンスト・フォン・ヴォルツォーゲン等が文芸上の協力者となり，またマックス・リーバーマン，ハンス・トーマ，トーマス・テオドール・ハイネがグラフィック製作に力を貸した。この雑誌はドイツの芸

術愛好家へ画期的な一時期をもたらした。

この雑誌が契機でインゼル出版社が生まれるのであるが，雑誌「インゼル」は1902年には休刊へおちいった。というのは，ビーアバウムが改善を主張したのに対して，ハイメルが豪華な内容を改めようとしなかったために，ビーアバウムは憤慨して企画からおり，去ってしまったからである。この間の事情は彼の実話小説「郭公王子 —— 好色家の生涯，行為，意見そして地獄墜ち」(1907)でも描かれているが，同時にこの小説は直ちにドイツ中に醜聞事件を惹き起した。そのため，シュレーダーとハイメルはこの建物を去ることになった。これを機会に，シュレーダーは豊かな文才を開花させるが，他方，ハイメルはインゼル出版社の支配人としてブレーメンで現代文学を促す仕事に従事することになった。

29. ビーアバウムの旧居 (Kaulbachstr. 41)

ビーアバウムは凱旋門とさほど離れていないカウルバッハ街41番に居住したことがある。彼は学業を放棄してライプチヒからミュンヘンへ移り，ジャーナリストまた作家として世渡りする決意を固めてやって来たときのことである。けれどもミュンヘンのジャーナリズムはベルリンに較べ低調で貧弱であったので，彼はデリカテッセンの2階の貧相な学生用の小部屋に住むことになった。ここでさまざまな新聞雑誌へ絵画展示に関する報告，諸芸術家やその作品についての論文をまとめて送った。やがて彼は多数の詩人や画家と交際するようになり，また1892年にはロンドンでグスティ・ラートゲーバーと結婚した。

彼はパウル・ハイゼを中心とするサークルへ嘲笑を盛り込んだ詩篇を書き送ったり，また愛や自然を主題とする作品をまとめたりした。彼の愛の詩で誉められ賛美されたのは見下されがちな女中とか，女給仕，百姓女であり，またエロチックな内容は市民層に強いショックを与えずにはおかなかった。1893年に最初の大作「学生の告白」が刊行された。

1893年12月，彼は妻と一緒にベルリンへ行き，「自由舞台」の編集を引き受けた。けれども，彼はまたミュンヘンへもどった。1894年春に雑誌「パン」を創刊した。1898年に「インゼル」の共同発行人となった。高収入を得てイタリアへ自動車で大旅行したこともあるが，1899年に妻がベルリンの作曲家と逃避行事件をひき起こしたしたので，1901年にフィレンツェの18歳の女性ジェンマ・プルンネッティ＝ロティと再婚した。

30. リカルダ・フッフの旧居（Kaulbachstr. 35）

カウルバッハ街はルートヴィヒ街，さらにその延長のレオポルド街と平行して東西に走っている道で，しかもイギリス庭園との中間に位置し，この通りの33番には，ジェスイット会系の私学「ミュンヘン文科大学」がある。ここの図書館（Bibliothek der Hochschule für Philosophie, 8000 München 22, Kaulbachstr.33, Telefon 286077）は，他の図書館が閉鎖されている土曜日でも午前中のみは閲覧できる。

この静謐な学園脇の35番の奥のガルテンハウスに，リカルダ・フッフ（1864-1947）が住んだことがある。彼女は南独の大都会に前後3回にわたり1900年から06年まで，1911年から16年まで，1918年から27年まですごした。初めは心地よい屋根裏部屋，やがて2階に移り住んだ。この住居で「凱旋横丁より」(1901)，「ドイツの大戦争」(1912-14)，「ルターの信仰」(1916) 等がうまれた。自らの著作に嘔吐感を覚えることもあり，意気消沈してうちしずむこともあったけれども，通常，彼女は午前中陽のあたる広い書斎机にむかって過ごし，疲れるとバルコニーから彼女はカウルバッハ街の子供たちが遊ぶのを眺めて楽しんだり，ルートヴィッヒ街を初期の自動車や軽快な馬車が行き交う風景，また牛車に乗った農夫や徒歩通学する学生の姿を目撃してすごした。

1926年，この女流詩人が60歳の誕生日を迎えた折，ミュンヘン市はあげて祝福した。さながら眠り姫の住む館の様にいつもは静かなガルテンハウスも，この日だけは賑わった。また「この日はドイツの婦人の日とすべきでしょう。むしろドイツの婦人の日にとどまらぬ日とすべきでしょう。と言うのは，祝さなければならないのはドイツの最初の女性であるばかりでなく，恐らく今日最初のヨーロッパの婦人であるからです[40]」と最大限の賛辞を冒頭にしたためたトーマス・マンをはじめとする手紙も殺到した。毎朝満ち足りないものはないという気持ちで目覚めるミュンヘン名誉市民となった女性も，1927年に，娘のいるベルリンへ去った。イーザル河に映る南国の空と山気，ビヤ・ホールの喧噪と香のこもる教会，不平だらけの役人や散策する美しい町娘，粗野な農夫とお祭騒ぎの好きな芸術家たちに慣れた彼女は，ベルリン市のシュプレー河の水にはなかなか馴染めなかったようである。ミュンヘンはぴったり馴染んだ古手袋のように素晴らしく快適なもののように思い出されたのである。

未完

1994.4.7

注

(38) 姉崎正治「停雲集」明治44.7.博文館　P.347f.

(39) Ibid. P.348.

(40) Thomas Mann:Sechzigsten Geburtstag Ricarda Huchs. In:Gesammelte Werke in 12 Bden. S. Fischer Verlag 1960. Bd. X, S. 429.